

一期一会の出会いを大事にしながら、 流れるように過ぎていきたい

京都〈ゆうゆうの里〉

掛谷英子様(74歳) 平成29年5月 一人入居

人類学と主人との出会い

岡山の教師の家庭に生まれました。人見知り内で内弁慶な子供でした。よく覚えているのは、小学校の家庭訪問の先生が来る時はいつも隠れていた事です。両親は暖かく見守ってくれました。少女漫画だけじゃなく赤胴鈴之助やターザンも好きでした。空を見たり、星を見たり、自然と戯れるのが好きな少女でした。

京都の大学に進学しましたが、学生運動が徐々に激しくなってきた



〈ゆうゆうの里〉内の枝垂れ桜の前で

た時代でした。学校にも行きたくなくなり元気がなくなってきた

を感じていました。そんな中、理学部の私が『人類学』という講義を受ける事にしたんです。講義を聞いて「私の興味はこっちだ！」と。そこには変わった人もたくさんいました。それがとても楽しくて、やっと自分の居場所を見つけたと思えました。主人とはこの講義で出会いました。

アフリカで芽生えた 自己肯定の気持ち

主人はアフリカに行くために人類学を受講していました。大学院でも人類学を研究していて、そのためにアフリカに行く事に。結婚していた私はついていったんです。主人はそのまま人類学者になりました。主人は自由でマイペースな生活を好み、そして優しい人でした。私が何をやるにしても自由にさせてくれました。

一緒に一年暮らしたタンザニアが私の初めてのアフリカでした。

そこでは家屋は自然のもので造られています。食べるものはキャッサバとかとうもろこしを栽培したり、湖近くの人は魚を捕ったり、山に住む人はケモノを捕ったりきのこを採ったり、それを誰かがひとりじめするのではなく、みんなでシェアします。まさに自給自足の暮らしでした。「これこそが本当の人間の基本なんだ!」「帰国しても、あの人達のように生きよう」と思いました。そしてその経験が自分の人生の根っこにある考え方になりました。

母を介護しながら考えた 老後の居場所

その後、主人の両親、私の両親を介護し見送ることになりました。その間に主人に肺がんが見つかりました。さすがにその時はショックでしたね。放射線の治療が効いて普通の生活ができるようになったものの、二度目に肺の具合が悪くなった時は、覚悟せざるを得ませんでした。主人を見送り、最後に介護したのは私の母でした。母も私も一人になっていたせいか、最後まで本音で話し合う時間が持てました。

この介護経験から、一人で歳をとる事はできないと分かっていたから、早く自立入居型の施設

で安心を得たいと思えました。私はアフリカの生活が根っこにあるから自然が好き。こちらの施設を見学

した時、自然の中でゆったりと静かに過ごせたら幸せだなって思いました。

ここではあらかじめ約束しなくとも誰かに会える

ここではアスレチックジムのトレーナーが優しく教えてくれます。前かがみになっていた姿勢もきれいになりました。体力を維持して日課の自然遊歩道を歩く事も続けたいし、四国八十八箇所めぐりにも挑戦したい。

フオークダンスには、ジムのグループの方から誘ってもらいました。アフリカで踊っている人達をみて、常々踊ることをやってみてみたのです。やってみると楽しいです。

ここでは食堂にいけばどなたかとお話しできるし、施設を歩いたら色んな方と自然にお話ができます。「今」を大事に一期一会の出会いを大事に過ごしていきたい。それが私の希望です。



ご入居者の友人と一緒に
(向かって右が 掛谷 英子様)